

別海町 農業のあゆみ

別海町ではじめて農耕を試みたのは加賀伝蔵という人物です。現在の秋田県八峰町の生まれで、寛政11年(1799)に幕府により設置された野付通行屋で支配人やアイヌ語通訳をしていました。安政4年(1857)に野付半島で畑を耕し、本州から色々な種を取り寄せ27種の雑穀を作ったと言われています。



加賀伝蔵が開墾した野付半島の図



加賀伝蔵

明治に入り北海道開拓使は、政策の一環として本州から移民を進めました。開拓資金や馬の貸付を受けて開墾を始めましたが、機械も無く、厳しい自然との闘いで思うように進まず、漁業などお金になりやすい仕事に移っていきました。

そうした中、清実喜三郎、上杉昇太郎は牛を買い乳を搾るなど、別海町酪農の先駆的な試みを行いました。

明治31～32年(1898-1899)に西別殖民地の区画解放を契機として西別川流域を中心に入植が進み、海岸から内陸へと殖民地区画が進み農耕従事者の定住が始まりました。

さらに、明治43年(1910)の北海道第一期拓殖計画、昭和2年(1927)の北海道第二期拓殖計画により各原野への団体移住による入植が積極的に進められて行きました。

開拓者は入植するとまず、原野の一部を焼き払い、掘立小屋を作り土地の開墾をはじめました。本州で米作りをしてきた農民が、寒い土地で農業を進めることは大変なことで、道具、肥料も十分ではなく、技術も遅れている中で苦労を重ねたようです。



昭和初期のおがみ小屋
(入植者の住宅が間に合わない時に作られた。)



昭和初期の様子